書評

春日政治博士著「古訓点の研究」について

大坪併治

春日政治博士の「古訓点の研究」について、編輯部から書評を書くやうに指示を受けた。もとよりその任ではないが、編輯部としても都合があってのことゝ愚考し、僭越を顧みないで敢へて蕪稿を草することにした。

本書には、博士が過去三十年に亙って発表された論文の内、国語叢考、万葉片々等に収録されたものを除く二十二篇が集められてゐる。即ち次の如くである。

1、国語資料としての訓点の位置（1―23頁）
2、正倉院聖語蔵点本の調査（24―33頁）
3、古訓点の調査を中心とした大矢博士の研究（34―42頁）
4、金光明最勝王経註釈の古点について（43―57頁）
5、成実論天長点続貂（58―78頁）
6、高野山にて観たる古点本一二（79―104頁）
7、聖語蔵本中観論の古点について（105―118頁）
8、金光明最勝王経註釈一本の古点について（119―138頁）
9、聖語蔵本央掘魔羅経の字音点（138―155頁）
10、斯道文庫蔵本願経四分律（156―187頁）
11、聖語蔵本唐写阿毗達磨雑集論の古点について（188―208頁）
12、小川本大乗掌珍論天暦点（209―224頁）
13、金剛般若経賛述嘉祥点（225―247頁）
14、刊後残筆（248―261頁）
15、初期点法例（262―272頁）
16、法華経玄賛の古点について（273―282頁）
17、聖語蔵本菩薩善戒経点（283―292頁）
18、片仮名交り文の起源について（293―306頁）
19、和漢の混淆（307―340頁）
20、古点の況字をめぐって（341―364頁）
21、語彙雑考（365―371頁）
22、古訓雑記（372―377頁）

いづれも訓点の研究に関するもので、本書の序によれば、(1)より(3)に至る三篇は序説に当り、(4)より(17)に至る十四篇は個々の点本の調査に関するもの、(18)より(22)に至る五篇はその応用に属するものであるといふ。

(1)は正しく本書の序説といふべきもので、国語資料としての訓点の価値を論じ、誦読が固定してゐること、年代的に確実であること、分量が豊富であることの三つを挙げ、訓点の研究が国語史の闡明にどのやうに役立つものであるかを、音韻・語彙・文法・

文体の各領域に亙り、多くの実例を挙げて説明した後、訓点語が一種の飜訳語として持つ不純性と、訓法の伝統から生れる時代語との乖離を指摘し、訓点語を取扱ふ場合の注意としてある。本篇は、昭和九年十一月、京都大学国文学会二十五周年記念大会における講演筆記で、わたしも後輩学生の一人として、親しくこの講演を聞かせて頂いた。故吉沢義則博士は、わたしどもの在学中、一度も訓点に関する講義を行はれなかったから、あのやうに纏つた形で訓点研究の心得を教へられたのは、全く始めてのことであった。今読み返してみても、必要なことは殆んど余すところなく述べられてをり、訓点研究に志す人々にとってこよなき手引きであることに変りはない。強ひて云へば、国語資料としての訓点の価値の第一を、誦読の固定におかれたところに問題があらうか。訓点の表記に用ゐられるヲコト点と略体仮名は（教義の秘密を守る暗号ではないが）、いかに反復熟読しても、なほ不明なものの残るのが常であり、一般に白の胡紛あるいは朱で書かれてゐるため、剝落し易く、幽かな痕跡を辿って読み取らねばならぬことが少くない。さらに、加点そのものが点者備忘のためであって、他人に見せるためのものではなかったから、省筆が多く、甚だしい場合には、一語の内でも、その語を想起するのに必要な部分だけが記されて、他は省略されることもある。他に例のある場合は、それとの対照によって、省略された部分を補ひ、正しい語形を把握することもできるが、他に例のない場合は、省略された部分は、不明のまゝか、または、省略されたことに気付かず、そのまま正しい語形として誤認して了ふことになる。それゆゑ、ヲコト点と略体仮名によって正しく原典を読み下すことは、実は容易ならぬ難事であり、絶えず誤読の危険に曝されてゐると云はなければならない。訓点語と訓点資料第七輯に、山田本妙法蓮華経方便品第二古点に対するわたしの試読と、築島・小林両氏の共同研究に成る訳文とが一緒に掲載されてゐる。双方とも学者的良心に基づき、その正しさを信じて発表したはずであるが、かなりの相違が見られる。わたしのにも不十分な個所があったが、両氏のにも明らかに誤読と見られるものがある。訓点とは、かういふものなのである。従って、読み下されたものは、もはやその人の研究物であって、訓点資料そのものではないと、わたしは考へる。訓点の誦読が固定してゐないからである。

(2)は、聖語蔵訓点資料の目録で、将来再び閲覧の許可された場合の案内として役立つであらう。

(3)は、故大矢透博士の没後、博士に対する追憶の文として書かれたものらしく、博士を知るのに必要な文献。「水木君の大福帳」といふのは、わたしも故水木真弓先生から見せて頂いたことがある。

(4)(5)(17)の四篇は、ヲコト点及び仮名字体の上から、同じ系統（恐らく後世のニシハカ点、またはニトハカ点の祖点）に属すると推定される三つの資料——飯室切金光明最勝王経註釈古点・成実論天長点・聖語蔵中観論古点——及びこれに関係のある聖語蔵菩薩善戒経古点等に関する調査である。博士は、これらの資料について、ヲコト点・仮名字体を示し、音韻・語彙・語法・文体上注目すべき多くの例を紹介すると共に、相互の関係を明らかにし、古点本に存するヲコト点と仮名との系統を尋ねようとされた。この試みは、その後発見された三つの新資料によって支へら

れ、より確実なるものとなった。新資料の第一は大乗掌珍論承和元年・嘉祥二年点一巻で、中田祝夫氏によって紹介されたもの、第二は前記法華経方便品第二古点一巻、第三は大乗広百論釈論承和八年点一巻で、川瀬一馬博士の発見にかゝるものの由。わたしは昨秋中田祝夫氏に教へられ、調査する機会を得た（これの詳細な調査報告は、近く中田氏との共同研究として発表させて頂くはず）。これらの資料を参考として、博士の試みを今一度辿ってみると、次の如くである。

天長点と飯室切古点に、さらに法華経古点を加へ、この三者は、ヲコト点は殆んど完全に、仮名字体は大部分が一致してゐるから、一グループをなすもので、天長五年前後に同学の僧によって施点されたものと見る。ヲコト点についていふと、博士が示された天長点と飯室切古点との点図には、スルのLが左中におかれてゐるが、実際にはタマフとセとの中間が正しい位置のやうである。法華経古点はもとより百論釈論承和点・掌珍論承和・嘉祥点も同様である。中下の∴をルガとよんであるのもいかが。

○如ク二(中略)貢ハタル主ヰ不ニ能レ得(る)こと便ヲ、行者モ亦爾(なり)。
（天長点巻十七）

○如ク二父未レ生何能生ニ子ヲ一、（〃）

前の例には、「不」にこの点があり、後の例には「生」にこの点と、中上にナス・ナル・ナ等を示す横線とが加へられてゐる。前のは能ハズアルガ如クと読み得るが、後のは子ヲナルガ如クとはよむことができない。∴はトイハム、またはトイハムガ等を表すもので、能ハズトイハムガ如ク、子ヲナストイハムガ如ク等と読むべきものではあるまいか。飯室切古点も同様である。なほ、右上のLをトハ、右下のLをレバとよまれてゐるのは誤りである。

○十善業道、所謂離殺乃至正見なり。（天長点巻十二）

○汝が言ニ身口ヰ能(く)并ずと事(を)、是者亦不レ然。（〃）

前の例には「道」に、後の例には「言」に、右上のLがある。前のは十善業道トハでも分るが、後のは「汝が」の主語を承ける述語であるから、トハでは困る。動詞によんでトイフハとしなければならない。(12)に紹介されてゐる小川本大乗掌珍論天暦九年点や、本書にしばしば引用されてゐる石山寺本法華義疏長保四年点には、かゝる場合にトイハの仮名を持つものがあるが、トイハはトイフハから音韻変化によって生じたものであり、トハからトイハの変化を考へることはできない。次に、レバとよまれた右下のLは、例へば

○若(し)到(ら)ネども[而]見、一切の処の色を見(る)応(し)
（天長点巻十七）

○若(し)見ネども[而]能(く)憶者、盲人(も)亦色を憶(す)応(し)(し)（〃）

の「見」「憶」等に加へられてゐる。「見」は見レバと読むこともできようが、「憶」にはなほス・トの二点があるから、憶ストイレバでは意味をなさない。これは、見ルトイハバ、憶ストイハバとよむべきもので、右下のLは（ト）イハバの記号であらう。博士がこの点をレバとよまれたゝめ、次のやうな文意不明の例が生じた。

△問曰若五陰ハ世諦ヲ以テノ故ニ有レバ、何ニ(カ)色等ノ法ノイ是真諦ト説クカ(耶)（ママ）

有レバを有リトイハバとよみ換へることによって、始めて意味

が通るだらう。なほ、ヤの記号をカに通じて用ゐる（ゐゑゐ）といひ、右の例も、説クヤとあるのを説クカとよんでゐられるのもいかゞ。ヤはヤとよんで差支へないのではあるまいか。トに三種の点があって使ひ分けられてゐる（例外もあるが）ことは、博士の指摘された通り。因に、先に発表した法華経古点の点図に、カとノとの間にコトの点があり、成実論のトと違ってゐるやうに見えるが、あれは図の書き誤りであって、コトではなくトであり、試読ではすべてトに読んでおいた。星点は成実論天長点と完全に一致してゐるのである。この機会に訂正しておきたい。ヲコト点について今一つ付言すべきは、左外の縦線のトが人物の呼掛の記号として用ゐられてゐることである。例へば

○善男子、汝は来世に於（て）、精勤の力を以て当に无量百千の苦行を修し、最勝尊と為（な）るを（中略）具足せむ。（飯室切古点）

の「子」の左に施されてゐて、下の「尊」のトと同じ記号である。この点も二者共に一致してをり、百論釈論承和点を越えて、掌珍論承和・嘉祥点に受け継がれる。これは、単に文義を理解するためのしるしに過ぎず、具体的な音を示してゐるのではない。（**このことが理解されてゐなかったために、築島・小林両氏の法華経古点の訳文に、トまたはヨなどゝよまれてゐるのは誤りである。**）仮名についていふべきことはないが、略符の中に一つ見落されてゐるものがある。それは、ヲといふ記号であって、ソエニとよむべきものらしいのである。このことは、法華経古点を調査した際に気付いたが、例が少く断定できないので、記号だけを挙げて、よみ方は書かないでおいた。しかるに、その後、天長点と飯室切古点とをよみ返して見たら、やはり用ゐられてゐた。例へば

○此は正道（に）非（ず）、清浄の道に非（ず）。△随苦辺と名（く）（天長点巻十五）

○遍計相無（き）をもちて断と説（く）可（く）不（あらず）。△但解（る）こと能（は）不（ぬが）故にと云（ふ）。染の依と他は有なり。△滅（せ）不（ぬが）故にと言（ふ）。（飯室切古点）

右の文の△の位置にこの記号がある。法華経古点の場合は、試読一枚目十一行目「成」の右上、及び十枚目八行目の「無」の右に書かれてゐる。ナリヌの右に□を以て示したのがそれで、「無」の上においてよむべきものであった。この記号は、百論釈論承和点・掌珍論承和・嘉祥点にも継承されてゐる。

次に、加点年代からいふと、掌珍論承和元年点が来るのであるが、これには白点に承和と嘉祥との二つの識語がある上、更にいづれにも属しない朱点もあって、どれが承和元年の点か識別することができない。それゆゑ、百論釈論承和八年点を先に見ると、ヲコト点は、星点において、訓を示す点を欠くだけで、天長点と一致し、他の線点・鉤点・円点等においても、天長点に在るものはすべて（中下の‥を除く）見出される他、天長点になかった十余の新点が加はってゐる。音は星点の他中央の縦線で示され、カとノとの間にあってトを示す星点は、「雖」に反る時に限って用ゐられること、天長点と同様であるが、単独には用ゐられず、左外の縦線のト（上方に移って、左肩近くなってゐる）と一緒に用ゐられるところが異ってゐる。また右中の横線はトキの他タマフをも表はし、セのLはセリになってセは他の記号を以て示される。要するに、百論釈論承和点は、全体として天長点に極めて近いものであるが、しかも若干変化の萠してゐるところが注目され

る。仮名では、チ・ツ・レが天長点と異ってゐる。

次に、掌珍論承和・嘉祥点を見ると、ヲコト点は、星点において、シが右中に移り、コトは右中のニで示され、訓を示す星点がなく、音は星点及び中央の縦線で表される。カとノとの中間にあるトの星点は、左外の縦線と共に「雖」に反る時に限って用ゐられ、左外の縦線が左肩に移ってゐること、百論釈論承和点に同じ。他の点では、左下近くレを表はした横線が消え、レは左上のセで示され、タマフを表はしたLが右中に移ってゐる上に、天長点・百論釈論承和点いづれにもなかった新点が加はってゐる。全体として、天長点の系統を引きながら、その相違は、百論釈論承和点よりも更に大きくなってゐる。厳密にいへば、百論釈論承和点も一度に加点されたものでなく、掌珍論承和・嘉祥点も前後十数年に亙っての加点であるから、両者の時代の先後を決めることは困難であるが、ヲコト点の形式そのものは、百論釈論承和点が古く、掌珍論承和・嘉祥点が新しいと見なければならない。仮名は、天長点とケ・セ・チ・モ・ラ等が相違し、天長点よりも却って画数の多い仮名を用ゐる傾向がある。

さて、聖語蔵中観論古点を、博士の示されたものによって上記の資料と比較して見ると、ヲコト点は、星点において、「雖」に続くト、及び音を示す点がなく、他は掌珍論承和・嘉祥点に同じ。横線では、左下のレのないところがやはり掌珍論承和・嘉祥点に近く、中央にラが位置してゐるのは、掌珍論承和・嘉祥点に見られなかったもの。縦線では、天長点以来あった中上のヌが消え、また、右中（または上）の斜線で示されてゐたタリが、縦線となって左下に移ってゐる。その他、掌珍論承和・嘉祥点と一致するものと相違するものとが相半ばするといった状態である。それゆゑ、ヲコト点の系統からいへば、すでに中田氏も指摘してゐられるやうに（国研 263—264 ）、中観論古点は掌珍論承和・嘉祥点より出でゝ少しく変化したもの、といふことにならう。たゞし加点の時代は、博士が推定してゐられる天安よりも、もう少し遡らせることもできるのではあるまいか。仮名は、百論釈論承和点とケ・テ・ヌ・ノ・ラが相違し、掌珍論承和・嘉祥点とケ・ス・セ・チ・ヌ・フ・モ・ラ等が相違し、却って前者に近いやうである。

次に菩薩善戒経古点について、博士の挙げられた点図を見ると、中観論まであった中上の星点カが消失して、左中の横線に変じ、左外にあった縦線のトがなくなって、右外にあった星点のトがその位置に移ってゐる。このことがまづ最も大きな相違であって、天長点から中観論まで少しづつ変化して来たものが、こゝで大きく飛躍したことになる。その他の点についても、掌珍論承和・嘉祥点と一致するもの、モチテ・トキ・トイフの三つに過ぎず、残りの十四は相違してゐる。博士は、星点は中観論古点・唐写説無垢称経古点・掌珍論承和・嘉祥点等に似てゐるが、その他の点ではこれに近い点本を見ない。点法の発達程度から推して、天長前後のものであらう（286 ）—といってゐられるが、管見では、石山寺本大智度論天安二年点がもっとも近い。天安点の星点は、中観論古点の右外のトを取り去ったもので、中上にカのあるのと、左外にトのないのとが、菩薩善戒経古点と相違するところ。その他の点では、モチテ・トキ・ク・ヤ・ス・ナリ・オキテ・ソ・スル・コト・タテマツル・セム・ル・トイフ・マウスの十

五が一致し、タマフ・ム・ナル・ヨリの四が相違してゐる。その内、タマフは同じ縦線が天安点は右中内よりに、善戒経古点は右上内よりにあり、ヨリは天安点はフが、善戒経点はノが、同じ右上にあるといふだけの違ひであるから、実際の相違はもっと少く、類似するところが多いといふことになる。天安点のことは、本書にしばしば言及されてをり、博士も知悉してゐられるはずであるのに、なぜ天安点との比較に想到せられなかったか不審である。わたしは善戒経古点は未見であるが、ヲコト点に関する限り、天安点と密接な関係を持ち、それゆゑに、天長よりも天安に近い加点ではないかと想像する。仮名を見ると、中観論古点と一致するもの二十、相違するもの十八、天安点と一致するもの三十二、相違するもの十一であって、やはり天安点との関係が深い。たゞし、ス・テ等に異様な字体の見えることは、星点にカがなく、上中が空白になってゐることゝ共に、善戒経古点の注目すべき特徴であり、この点が、天長点より中観論古点に到る系統とは、やゝ異った系統に立つものであることを示すものであらうか。そして、天安点は、その両者の合流の上に成立したものなのであらうか。善戒経古点には、[n]をイで示した「浣(カイ)」や、開拗音をア行で示した「馮(ヒョ)反」等の例があり、博士は、加点の早さを示す証左としてゐられるが、一方その反証とも見られるオをヲに誤った「駈(アヒ)」の例もある。これは、地蔵十輪経元慶七年点の「暗(オクラキ)」と共に、注目すべきものである。

(6)は、高野山宝寿院蔵略出経延久点二巻及び同光明院蔵蘇悉地羯羅経寛弘・承暦点三巻の調査を中心とする記述で、漢字の鼻音・国語の撥音の変遷とその表記、濁音符号の歴史等に関し、教へられるところが多い。

(8)は、正倉院聖語蔵及び東大寺図書館に存する金光明最勝王経註釈古点三巻についての調査。この点は、飯室切古点とは別種のもので、石山寺本瑜伽師地論古点と同系であり、中田氏によれば、松田本四分律行事鈔古点にも近い由。西大寺本金光明最勝王経古点と比較し、古訓に伝統の存する一方、学統によって文義の解釈に基づく異訓の行はれてゐたことが説かれてゐる。行ゼムマクは面白い例。「消」は大智度論天安点巻三十二にも見える。

(9)は、聖語蔵本央掘魔羅経古点の字音の調査。古経の音読された実情を知り、漢字音の考察に役立つ。

(10)は、斯道文庫本願経四分律古点一巻の調査。この巻は、博士並に令息和男氏の御好意により、昨夏幸に見る機会を得たので、その折のノートと比較させて頂く。

ヲコト点について。博士が挙げられた点の他、左中にベシの斜線／、同じ位置にアルの鉤点レがある（従って、モノの点は上よりにおくべきである）。ベシは、例へば次の「言、可」等に加へられてゐる。

○彼(の)使応下還二(りて)比丘尼寺の内一に語(りて)言上(よ)べし。（十四）

○可レ坐(ゆは)(す)便(ち)坐せよ。（十六）

前の例は「語リテ言フ応シ」（一八三ゞ）とよまれてゐるが、ベシの点は「言」にあって、「応」にシの点があるのではない。「当字は必ずマサニと訓んでベシは点を以て下に補読する」（一八四ゞ）とあるのも、引用された二例

○当ニ頂受スベシ。（三）

○施主ハ厭フ無クシテ、而モ受クト雖モ(者)、当ニ足ルコトヲ知ルベキナリ。(二十一)

の内、前のはヘが仮名でシがヲコト点で、後のはヘキが仮名で示されてゐるのを見ると、点は仮名のことで、ヲコト点の意味ではないらしい。因に、後の例は誤読で、「施主は厭(ふ)こと無しと(ク)雖も、[而]受者当に…」とよむべきもの。アルの点は、例へば次の「根・不」等に加へられてゐる。

○彼ニ[根]ある者に大戒を授ケツ。(十四)

○我(が)夫行(き)て在(ら)[不(ず)]あるに、余(の)人(の)辺にして[於]身を得たり。(十九)

トを示す右下の斜線／は、人物の呼掛の記号にも用ゐる。例へば博士が引用された例

○仏問ヒテ言ハマク、難陀、汝覚楽シツヽヤ不ヤトノタマフ。(二十四)

○阿難ノ言サク、大徳、懺悔ス、女人ハ知ルコト無シトマヲス。(二十五)

の「陀・徳」に加へられてゐる。これは全く天長点と同じであって、記号は変っても、等しくトの点を呼掛に用ゐるところが面白い。また、博士がベシを表はすと見られた右下の八は、たまたまト・テ両点が合したものであって、特定の点ではない。例へば

○「世尊是(の)如き教有す。血出者に大戒(を)授(く)応(から)[不(ず)]とのたまふ」といひて、彼便(ち)月水の出(で)不(ぬ)者に戒を授ケツ。(十四)

○爾(の)時に居士有り。「比丘僧を請じて明日に食を与へム」といひて、彼い夜半に[於]種種の肥美の食を弁具し已(り)て、(十七)

の「不・与」に加へられてゐる。「不」の場合は、トを二度いふことになるから、／の下に八が書かれてゐる。なほ、左下の円は上述したやうにトイフハであり、左中の円はトイハバとよむべきものらしい。

仮名について。「この巻には、ア行の衣は全然見えず」(163ふ)とあるが、次の文に現れる。

○是(が)中に尽形寿マでに能(く)持(つ)不(ず)といはゞ答(へて)能(く)すと言へ。若長利の檀越の施ー衣を[得]、若軽衣(を)[得]、若割截の衣を[得]ば、受(く)応し。(十一)

字体は「衣」の行体で、剝落して淡いから、博士が見落されたのも無理はない。

語彙について。「過」のアタヘ・ワタシ共に珍しい訓。「肯」のアヘはカヘともよめる字体。「唾」のツハキは動詞として用ゐられてをり、ヲ・シの点は見えない「捫摸は熟合の縦線で結び、「摸」の右下にトの点、右側にナテの仮名がある。文選読みにして、——ト・ナデとよんだのではないか。「脚跌」もやはり縦線で結び、「跌」の右下にト・テの交叉した点、中下やゝ左よりにシの点、左側にフミナメの仮名がある。——ト・フミナメシテとよむのであらう。「唐捐」は熟合の縦線はないが、右側にムナシクの仮名が、「捐」の右下にト、中下にハの点があるから、これも——ト・ムナシク・ハとよんだことが考へられる。博士はこれを唐シク捐テハ(175ふ)とよんでゐられるが、テの点は見えないやうだ。もっとも、テ・トは、点とも線とも区別のつかぬ長めの点が、同じ位置に左向きと右向きと方向を異にして打たれてゐるだけであるから、あるいはわたしの見誤りかも知れない。

長大のヒトトナラシメタテマツレリは、よみにくい仮名と点がよく正確によみ取られてある。「恐リ」はオソルの誤読か。

語法について。「来」のキタシ・キタセの訓、「乃至」の下を——マデニといひ放つ例、上代の古用を伝へた——マセバ——マシの呼応等いづれも注目すべきもの。格助詞イが用言につく例として挙げられた「聚落住処ニ有ルイ」（一八一ゟ）は有ルト共ニの誤読。「比丘尼ト作レルイ」（一八〇ゟ）の下にはハがある。「汝覚楽シツヽヤ」（一八〇ゟ）の「覚楽」は、熟合の縦線で結ばれ、「楽」の右下にシの点が、右側に三字の仮名がある。前後の関係からすれば、「覚楽シツヤ」（ツは完了の助動詞）とあるべきところ。三字の仮名の内、下二字は明かにツヤであるが、上の一字はツとはよみがたく、むしろシに近い曲線である。なほ、「善哉世尊、願フ聴キタマヘヤ」（一八六ゟ）は、この通りならば、命令形に詠歎の助詞ヤの加った極めて珍しい例であるが、原典にヤはなく、聴シタマへの誤読らしい。因に「聴」をユルスとよむ場合、下に来る補語は、単に——コトであって、ヲを伴はないのが普通である。他の巻を見てもさうなってゐる。本篇の引用文に、すべて——コトヲとあるのはいかゞ。

(11)は、聖語蔵本阿毗達磨雑集論四巻に関する調査。博士によれば、本点は、願経四分律、東大寺諷誦文稿のそれよりも古く、初期の訓点形態を知るべき貴重な資料。ヨに特殊仮名遣の遺法があり、キ・コ・チ・トに清濁の区別がある。ドモル・ホソグ・モタソブ・ヲマラ等音韻上珍しい例があり、詰（ハヾメ）責・稼（ブラフ）・穡（ハヤシナリヌルトホセ）・膞（ヒサ）脹（ハル）等他に例の少い語彙が見える。爾（シカ）は、大乗広百論釈論承和点に然（シカクノ）、百論天安点に爾（シカクス）、然（シカシテ）等の例がある。

(12)は、小川本大乗掌珍論天暦九年点一巻に関する調査。本巻は加点の事情と伝来の径路が明白で、訓点史上注目すべき資料である。わたしのノートと比較してみる。

ヲコト点について。新古二種の白点がある。新点は天暦の加筆で、古点はそれ以前のもの。わたしの集め得た三十近い点は、すべて大智度論天安点に同じ。博士はこの両点を十分識別してゐられなかったらしく、引用された例文の中に、若干の誤読が見える。新点について、星点の中下「点を欠く」（二一四ゟ）とあるが、ミを示す点があって、助詞ノミのミに幾度か用ゐられてゐる。

仮名について。ウが真仮名になってゐるが、これは古点の上に新点が重って見えるためであり、古点は干、新点はウの下十である（一例しかない）。サの「左」も古点のものらしく、新点は七を用ゐてゐるやうだ。

語彙について。「雪」のキヨ〇テの〇はメの仮名。誣罔（シヒラ）は、「誣」の右にシヒ、「罔」の右にヒの仮名がある。シヒシヒテと重言によんだのではないか。為（セシ）（二一八ゟ）は、古点シ、新点モシの点、ハはない。こゝの例文に重大な誤読がある。わたしは次の如くよんだ。

〇我が(古)所立の宗は為(も)し当に違二害せるベキ(古スル)自相続の中の所生の現量一(古ニ)。為当に違二害せるベキ他相続の中の所生の現量一にや。若(し)言レ違二害(す)ベしとイハヾ自相続の中の所生の現量一に……。（三）

「量」の中央から左下斜に引いた線は、共にヤであって、タルは

他の点（左下のレ）で示されてゐる。また、「当」の右には、共にヘキの仮名がある。「為」をモシとよむ時は、下にヤ・カの疑問の助詞を伴ふのが普通であり、博士の引用された西大寺本金光明最勝王経古点の例もさうなってゐる。「当」がなければ、モシ……現量ニヤ違害セルとなるべきものが、「当」が入ってマサニ——ベシとよまれたゝめ、モシ、マサニ……現量ニヤ違害セル・ベキといふ複雑なよみ方になったもので、逐語訳から生れた飜訳語法の一つ。

語法について。「是レコソ自宗ニ違フベ○○」（220ゟ）は訓点語に係助詞コソを用ゐた珍しい例。「違」の右中には、「可」を示す点レがあるが、ベシ・ベキ・ベケレいづれによんだか分らない。格助詞イの例として挙げられた「共知ニ違害スル過失有リト言フイハ」（221ゟ）の有リト言フイハは、有（リ）トイハ〔言〕の誤り。「有」にトの点が、「言」の下にイハの仮名がある。トイハはトイフハの変化した形、本点にしばしば現れる。「或」をアルイハとよんで接続詞に用ゐた例を示されたのは、貴重な発見。「或イハ復法性ニ入ラジ……」（221ゟ）の「或」の右には、「又」の字が書き付けられてゐる。アルイハをマタと同じ意味に用ゐた証左とならう。たゞし、こゝの例文には誤りがあるやうだ。わたしは次の如くよむ。

○或又いは有難ニ(も)復未ヲ(ず)と(古)入ニ(ら)法性ニ、而も是れ利根なるをもちて、為レに欲レ(ふ)が令ヨ彼をして……入ニれムと法性ニ、

（二）

「有」に反点がないのは、「或—有」の二字をアルイハとよんだのであらうか。「尚……スラ」の例「此レガ中ニ尚……慳嫉ヲ離レタル（ルルとあるは誤り）者トスラ……」（222ゟ）は、根津美術館本も同じ。「尚……スラ」の例は、根津美術館本に今一例あり、さらに古いところで、山田本法華経方便品第二古点にも一例見える。

(13)は、正倉院聖語蔵本金剛般若経讃述嘉祥四年点一巻の調査。ヲコト点は、他に全く例のない特異な形式の由。俛・爾許・所有（アタカチニ・ソコバク・アラユル）・「菩提ヲ得シコト有ラマセバ（者）是レ則チ所有得ニ為リナム」（224ゟ）等、珍しい語彙・語法が見える。キ・ケリの用法に関し、「すべて過去の叙事をするには、必ずキを以て書出して、中間には現在形に変ずることがありとしても、終は赤キになって結ばれるのが古訓点物の常であって、平安朝の物語文がその起首に於て、昔男ありけりといふやうに、ケリを用ゐることは決してない」（244ゟ）は記憶すべき言。

(14)は、「西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究」刊行後同書の訓法に不十分な点があったのを補正されたもの。捨・中・永・祖・方・安・赤等のよみ方、体言指定タリの連体形タルの用法、複雑な構文の解読に関する注意等が述べられてある。

(15)は、聖語蔵本景雲写根本説一切有部毗奈耶他十二部の古点本を年代順に配列し、初期ヲコト点の成立過程を論じられたもの。博士の独壇場である。

(16)は、石山寺本法華経玄賛古点二巻に関する調査。これについては、拙稿「石山寺本妙法蓮華経玄賛巻第三の訓点」（訓点語と訓点資料第五輯）、「石山寺本妙法蓮華経玄賛巻第六の訓点」（同上第六輯）に触れさせて頂いた。

(18)は、成実論天長点・飯室切金光明最勝王経註釈古点、西大寺本

金光明最勝王経古点等によって、訓点の註記に用ゐられた宣命書を論じ、片仮名交り文の起源をこゝに求めようとされたもの。(19)と共に、文体史上注目すべき論考である。なほ、中田氏が紹介してゐられる通り、大乗寺珍論承和・嘉祥点にも多くの宣命書が見える。博士に是非一度読んで頂いて御教示を仰ぎたいものである。

(19)は、訓点語が、奈良朝末期以後、国文に種々の影響を与へ、次第に和漢混淆文を作り上げて行く過程を、多くの例によって論述されたもの。

(20)は、況・何況をイハムヤ・イカニイハムヤとよむ場合について、その文法的な構造、特に文末における助詞との呼応を考察されたもの。

(22)は、国語学会創立十周年記念における講演の梗概を記されたもの。訓点語の領域を超え、広く国語々彙論に亙って、興味ある問題が取り扱はれてゐる。その中の一つ、「刮」をソダ、クとよまれた例（366ゟ）は、大智度論天安点巻第二にあるものであるがどうもこれは博士の見誤りで、

○知ゐると刮（ソダ、ク）ことを、知ゐると覆（おほ）ふことを創を、

とよむべきものらしいのである。ハダケ（連用形）は、牛馬の背や足を擦って、埃や垢を落し、血液の循環をよくすることで、わたしは、兵隊に行って、毎日やらされた経験を持ってゐる。和名抄鞍馬具の項には、それに用ゐる器具をウマハタケ（馬刷）といひ、名義抄にも同じ訓が見え、タに濁点を打ってゐる。わたしの理解が正しければ、古事記のソダ、クとは何の関係もない語であり、ソダ、クは依然として不明のまゝ残されることになるだらう。

(22)は、聖語蔵本菩薩善戒経古点、同地蔵十輪経正暦点、同十住毗婆沙論古点、石山寺本金光明最勝王経古点等より、駈（ツヒ）・屑（セツノカマ）・弐（アフム）・鉄（サヒ）・剗（クラフ）等の語彙を抄出して解説を加へられたもの。

以上二十二篇の論文につき、言及するところ、繁簡宜しきを得ず、正鵠を失するもの少くなかったと思ふが、それは、本書に取り扱はれた資料の尨大さに比し、わたしの調査し得たものが余りにも少く、本書の論述が、文字、音韻、語彙、語法、文体等、国語学の全領域に及ぶものであるのに対し、わたしの研究が余りに狭いためであって、初に「その任ではない」と断ったのは、こゝのことである。わたしは、博士にとっては、いはゞ「出席簿に載らざる学生」であり、卒業論文の作製について、初めて博士の御指導を仰いでから、直接間接に博士の学恩を蒙むること甚だ多い。本書所収の諸篇も、わたしにとっては、一つ一つが訓点研究の手本であった。しかも、天性の不敏と怠惰の故に、師恩に報いるべき日はいつのことか分らない。博士が大矢翁の学を承けて、これを祖述し、発展せしめられた偉業に顧りみ、慙愧に堪へないものがある。博士には、周知の如く、「西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究」といふ、訓点語学史上劃期的な著述がある。本書は、これと並んで、博士の研究の最も重要な部分を占めるものであり、訓点語に志す人々には勿論、国語学に携はるすべての人々にとって必読の書であることを推奨し、この稿を了る。

本書は、昭和三十一年六月、風間書房発行、A5・四二八頁
定価一八〇〇円である。

―島根大学助教授―